

2025.9.21 (日) 使徒26:19～23

26:19 こういうわけで、アグリッパ王よ、私は天からの幻に背かず、

26:20 ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤ地方全体に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えてきました。

26:21 そのために、ユダヤ人たちは私を宮の中で捕らえ、殺そうとしたのです。

26:22 このようにして、私は今日に至るまで神の助けを受けながら、堅く立って、小さい者にも大きい者にも証しをしています。そして、話してきたことは、預言者たちやモーセが後に起こるはずだと語ったことにほかなりません。

26:23 すなわち、キリストが苦しみを受けること、また、死者の中から最初に復活し、この民にも異邦人にも光を宣べ伝えることになるかと話したのです。」

<説教>

使徒パウロによる、ユダヤの王、アグリッパの前での〈弁明〉(26:1,2)の続きです。弁明と言ってもその中身は復活の主イエス・キリストを信じ、主イエスのみことばに従う信仰の証しであり、主イエスの福音の宣教、説教でした。

パウロは〈ナザレ人イエスの名に対して、徹底して反対すべきであると考え〉(9)、その考えを徹底的に〈エルサレムで実行し…ついには国外の町々にまで彼らを迫害して行きました〉(10-11)。そんなパウロが迫害のためにダマスコに向かっている途中でイエスご自身が〈天からの光〉として現れ、彼を打ち倒し、語りかけ、イエスの奉仕者、証人に任命し、立ち上がらせ、ユダヤ人と異邦人のところにパウロをお遣わしになりました(12-18)。パウロがそれまでの歩みは、まるで農夫に逆らって自分が進みたい方向に行こうとし、農夫の持つ〈とげの付いた棒〉を蹴って痛い思いをして最終的に農夫の意思に従って行動する他なくなる牛のようだ、とイエスは明らかにしてくださいました(14)。

それで、そのように、自分は「天からの幻に背く」ことはしなかった、できなかったとパウロは言います。自分は〈天からの幻に背かず(逆らわず)〉、イエスを信じイエスに従い、自分が考えた道(正確には罪深い自分の肉の思い願う道)から方向転換して、イエスが自分に定めてくださった、イエスのみこころにかなう道を歩むようになったとパウロはアグリッパ王に向かって改めて語るのです(19)。イエスがパウロをユダヤ人と異邦人のところにお遣わしになった(17)のは、イエスが彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、イエスを信じる信仰によって彼らが罪の赦しを得て、聖なるもの(つまり神のもの)とされた人々とともに天国の相続にあずかるようになる(18)、その働きにパウロを与らせるためでした。そのためにまずパウロ自身が目を開かれ、闇から光に、サタンの支配から神に向かって立ち返らせられ、イエスを信じる信仰によって罪の赦しを得て、聖徒たちとともに天国の相続にあずかる者へと変えられなければなりません。徹底的にイエスを信ぜず、イエスに反対し、逆らい、イエスとその教会を迫害していた自分が、その思いと行いをイエスの力によって全く放棄させられ、それまでとは正反対の方向に向きを変えられ、イエスの奉仕者、証人、使徒へとすっかり変えられ、イエスの福音を委ねられた。〈私は天からの幻に背かず〉とはそういうことでもあります。そ

それは別のことばで言えば、「私が望むようにではなく、主イエスが望まれるままに、なさってください」、「主イエスのみこころがなりますように」という信仰による意思、決断とも言えるでしょう（cf. マタイ 26:39,42）。また、「(自分であれ、他人であれ) 人に従うより、主イエスに従う」ということでもあるでしょう（cf. 使徒 5:29）。

そのように天からの幻に背かず、逆らうことを止め、従ったパウロは〈ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤ地方全体に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えてきました〉（20）。パウロのこの姿は 10-12 節にあった姿とは全く正反対であり、彼が天からの幻に背かずに従った故の姿です。私たちが「使徒の働き」9 章 19 節以降、これまで見て来たとおりです。

それで、パウロはユダヤ人たちからいのちを狙われるようになりました（21）。今回、こうしてアグリッパ王の前で弁明することになった事件は、21 章 27 節にあったとおり、エルサレムの神殿で捕らえられたところから始まっていました。しかしパウロがユダヤ人たちからいのちを狙われたのはダマスコで初めてイエスのことを宣べ伝え始めたその直後からでした（9:23）。ユダヤ人たちにとって、神冒瀆者だったナザレのイエスが神の子、約束のキリストであるということは絶対に受け入れられませんでした。また、それまでユダヤ教徒だった人々が、パウロの宣教によって、イエスを信じるようになってユダヤ教から離れ、キリスト教会に加わるようになりました。それまで「神を敬う」人々だった異邦人も同じようにユダヤ教を離れてキリスト教会に加わるようになりました。それが妬ましくて仕方なかったのでもありました。かつてパウロがキリスト者たちを熱心に迫害し、殺そうとしていたのと同じような熱心さで今度はユダヤ人たちがパウロの命を狙うようになっていました。

それでも（今まで見て来たように）パウロに怯む様子はありませんでした。イエスを信じ、イエスから使命を受けたとき以来、イエスのみこころ（御意思）に従ってイエスの証しをし、イエスの福音を宣べ伝えている自分の身にはますます神の善きみこころだけが行われるのであり、いつも〈神の助け〉があるとパウロは神に全く信頼していました。事実、〈今日に至るまで神の助けを受けながら〉〈堅く立って〉動かされることなく、即ち迫害や困難の中で忍耐して、どんな人にもイエスを証しし、福音を宣べ伝えたと証言するので（22）。そして、パウロがそうやって宣べ伝えてきたことは、〈預言者たちやモーセが後に起こるはずだと語ったことにほかなりません〉と言いました。これはつまり〈預言者たちやモーセが後に起こるはずだと語ったこと〉即ちアグリッパ王も良く知っている旧約聖書がイエスによって、イエスにおいて実現した、成就したということです。

それでパウロは言います。〈すなわち、キリストが苦しみを受けること、また、死者の中から最初に復活し、この民にも異邦人にも光を宣べ伝えることになる」と話したのです〉（23）。（旧約）聖書に記された神の約束のキリストがついにこの世に来られた。それがナザレのイエスである。このイエスが私たちの罪のために十字架で〈苦しみを受け〉て死なれた。そして〈死者の中から最初に復活〉された。このイエス・キリストが〈この民（ユダヤ人）にも異邦人にも光〉であり、生きているご自身を〈宣べ伝えることになる〉とパウロは証して来ました。これはパウロだけでなく、ペテロほかの使徒たちもそのように語っていたこともまたこれまで「使徒の働き」で私たちが見て来たとおりです。そして実は

〈キリストが苦しみを受けること〉、つまり「神に呪われ殺される苦難、受難のキリスト」、そして「そんなキリストが死者の中から復活する」、「そんなキリストが異邦人をもお救いになる」、「そのキリストとはナザレのイエスである」これらがユダヤ人にとってとても信じ難い、大きなつまづきでした。しかし「聖書に約束されたキリストを証しし宣べ伝える」とは、そういうイエス・キリストを証しし、宣べ伝えることでした。イエスと出会ったパウロが180度、方今転換をし、神に立ち返って証し、宣べ伝えたキリストは、そういうキリスト・イエスでした。このお方こそ〈天からの光〉〈天からの幻〉でした。

そんな主イエス・キリスト、神の善きみこころによって、主はパウロを、かつては彼が思ってもいなかった道、苦難と復活のキリスト・イエスを主と信じ、告白し、イエスの証人と歩む道へと導いてくださいました。その同じお方が今も生きて私たちにも聖のみことばを通して語りかけておられます。自分の肉の思い通りに従うことを止めて、聖書によって語りかけられる〈天からの幻〉に従い、備えられた主のみこころに従って歩みましょう。